

男性保健士が「保健婦」になった



佐々木亮平
(ささき・りょうへい)

岩手医科大学 衛生学公衆衛生学 助教
陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー

連絡先：〒028-3694
岩手県紫波郡矢巾町西徳田 2-1-1
019-651-5111 (内線 5775)



岩室紳也
(いわむろ・しんや)

ヘルスプロモーション推進センター
(オフィスいわむろ)

陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー
連絡先：http://iwamuro.jp/

保健婦は信頼されていたが「保健士」は？

東日本大震災では「保健師です」と言えば、多くの人が信頼し、疑う余地もなく受け入れられていた場面を数多く見聞きしました。これは被災地に限らず先人の保健師さんたちの活動や姿勢がそう社会で認識され、認められてきたからだと思います。保健師だけでなく、人は人や社会に認められることで元気になり、うれしくなり、さらに頑張ろうという気持ち湧いてきます。1994(平成6)年の法改正まで保健

婦は男性には認められていない国家資格の一つでした。佐々木自身も今から約20年前の春、岩手県内で初めての保健士(当時は法改正前で男性は保健「士」だった)として地域保健法が全面施行(97(平成9)年4月1日)された翌年に岩手県久慈保健所に就職しました。それまで女性社会であったこの分野の中で、どうしたら住民や同じ保健医療従事者に信頼してもらえるか必死に考えていました。当時の新聞に佐々木のコメントが載っていますが、自分自身で「信頼されたい」と話しているあたりが不安の裏返しと言わざるを得ません(図)。就職

橋渡し役、通訳者、協働促進者としての保健師

就職して10年後、佐々木は陸前高田市に出向となりましたが、その時期に再び取材を受けました(図)。そのときは保健師として10年の経験を経て、保健師は通訳

者、人と人との橋渡し役をする役割があるのではないかと話していました。対個人の活動もあれば、集団や組織対象の仕事があることも10年の経験から理解し、ただ、活動の成果は簡単には出ないことも身にしみて感じていたようでした。

保健所保健師として、また市へ出向してからも含め、結核患者とその家族、精神障害者当事者会や家族会、難病患者の当事者会、小学校や中学校、高校、子育て支援ボランティア、高齢者大学、観光協会や建設

業協会、原子爆弾被爆者、保健推進員や健康運動サークル、青年会議所など、さまざまな健康課題や課題意識を持った住民や地域組織と出会い、話し合い、考え続け、そのときでできることを一つずつ形にしていこうという経験を重ねてきました。

あるときは病気の予防対策であったり、既に罹患された方やご家族の生活の質を向上させる活動であったり、世の中に理解を求める取り組みであったり、新たな健康に関する価値観を広めようとする呼びかけであつたりと、内容は

図 男性保健師の新聞の取り上げ方

1998(平成10)年5月12日 岩手日報

男の視点で健康づくり

意欲満々、本県初の保健士

久慈保健所 佐々木さん「信頼されたい」
女性職場にも自然体で



2008(平成20)年12月8日 河北新報

健康増進 橋渡し役に

岩手県第1号の男性保健師
佐々木亮平さん(33)

保健師は「通訳者」
住民と手を携え、「地域の健康づくり」にまい進する

あつたりと、内容は多種多様でしたが根本のところでは共通していたことを通して、気がつけば「その人らしい健康や幸せづくりのための活動」が重要であることに気づかされていきました。保健師として、ただ隣に座っていただけのこともあれば、病院の先生方に協力を求めたり、子育てしやすい環境

づくりをお母さんたちと話し合ったり、健康体操を手段と一緒に運動したり、AID Sへの理解を切り口に人と人とのつながりを考えたり、とにかくそのときに自分ができることをし続けてきました。そうした経験の中で、なぜ人は立場を越えてつながり、協働することができているのか、そして協働のための協働ではない協働はどうして人や地域を活性化させ、元気にするのかという問いを知りたくなり、大学院に通った時期もありました。

「保健師」になった佐々木亮平

今回の連載を始めるにあたって、岩手県第一号の男性保健師であった佐々木亮平の保健師としての歩みを客観的に分析してみました。誤解を恐れずに分析結果を表現すると、保健師になったのは、佐々木は「男の視点で健康づくり」と意気込んでいましたが、住民との出会いを積み重ねる中で、気がつけば短期的な評価と長期的な見通しを求めがちな男性目線ではなく、まるで「女性」のように、目先の結果にとらわれない活動を丁寧にするようになっていきました。地道に、一人ひとりの住民の健康

づくりや幸せづくりを実現すべく、「結果」がすぐには見えなくてもぶれることなく、環境整備に走り回っていました。

健康づくりや地域づくりの成果が見えにくいのはいつの時代も変わりません。子育ても同じで、勉強ができる子に育てようとか、運動能力が高い子に育てようとか意気込んで思い通りになりません。だからこそ、子どもを育てる母親の母性のように、日々の関わりが大事になります。佐々木は関わり続けることの面白さや楽しさに気がついた結果、「男性保健士」がいい意味、真の意味で「保健師」になったのだとあらためて実感させられました。保健医療福祉関係者だけでなく、他分野、他地域、多文化のあらゆる年代の住民と関わり続けることの意味、面白さ、喜びを知ることができると、保健師の仕事の特徴であり、そのことを伝え続けることもまた保健師の重要な役割の一つになっている気がします。

保健師が公衆衛生医を導く

佐々木と岩室は東日本大震災後、復興で一番重要なことは、生きている一人ひとりが元気になる、幸せを実感できる地域つ

り捨てるのではなく、どのようにすれば一人ひとりが元気に、幸せになれるかをいろんな人と考え続けることだと考えています。阪神淡路大震災後に創設されたDMATと、東日本大震災後に議論し続けられているDHEATの違いを認識することも大切です。医療は基本的には個人に提供されるものであり、どこの現場でも通用するそれぞれのスキルを日頃の診療やトレーニング等で得ることができればそれなりに役に立ちます。しかし、公衆衛生は支援者それぞれのスキルとともに「その地域」に根ざした経験や関係性、信頼があるかどうかが必要不可欠です。

2016（平成28）年8月に発生した台風10号による豪雨災害では、北海道や岩手県など東北の各地域に甚大な被害をもたらしました。このときも被災をした現地自治体だけでは対応できず、DMATや保健所をはじめ外部からの医療や公衆衛生チームが支援に入ったことで体制を整えることができました。岩手県岩泉町は本州一広い面積を誇る町ですが、東日本大震災からの復興の最中、再び被災しました。しかし、外から入るチームの中に岩泉町を被災前から知っている保健師がいたことで、そ

くりだということを痛感しています。当たり前のことですが、そのような地域づくりは保健医療福祉関係者だけで達成できるものではないことは常に感じていましたし、ごく最近も新たな出会いを通して地域づくりが加速していく実感を感じました¹⁾。

このような成果が確実に積み上げられているのは一人個人の、それこそ佐々木亮平の、岩室紳也の力量によるものではなく、陸前高田市のソーシャル・キャピタルが着実に醸成され、いろんな人、いろんな機関がつながり続けているからです。では、そうやっていろんな人をつなげ続けているのはもちろん陸前高田市のすべての人たちなのですが、その中心的な役割は「保健師」だと言い切れず。陸前高田市の復興支援において、公衆衛生医（岩室紳也）は保健師の方々がさまざまな人や機関にこの公衆衛生医をつなぐ活動を展開してくださったからこそ公衆衛生医としての経験や力量を生かすことが可能となりました。具体的に言えば、住民主体の健康づくり活動に関わり、「これがいい」と話す場をいただくことで「公衆衛生医に認められた住民活動としての自信」になったり、地域づくりに向けた住民と多機関の連携会議（未来図会議）の運営

の経験と関係性、地域との信頼がよりよい支援活動の展開や外部と現地との具体的な効果的な調整につながっていました。

成果は後からついでくる

佐々木が陸前高田市の保健師・栄養士さんたちと展開していた活動がその数年後、陸前高田市の平均寿命を延伸するという結果につながっていました。もともとそのような結果が出たことも、震災後しばらくたつてから気づいたというのが実態です⁵⁾。当時は健康づくりには時間がかかり、また一人でもできないことから、住民とともにどう地域の環境に仕掛けていけるのか模索していた時期でもありました。健康づくりは地域づくりであるという言葉は古くて新しい言葉のように思います。昔から言い尽くされていた気がしますが、佐々木も岩室も本当の意味でそのことを理解し、実感できたのは東日本大震災の被災地に関わらせていただいたからです。

保健師にはできないもの、行政の限界、さまざまな行き詰まりを何度も経験しながら、でもできないのであればどうするところなのか。人を知り、人を探し、つながり

に関わることで、参加者が「このような積み重ねが大事という共通認識」を得たり、といったお互いが元気になる関係性をいただくことができました。

現場（被災地、非被災地）で求められる保健師

東日本大震災のような複合型かつ大規模・広範囲の震災に限らず、保健師が関わるすべての現場には正解がないからこそ、「いいか悪いか」よりも「できるかできないか」の判断を繰り返しながら、できる人が、できる人と、できるときに、できることを形にしながらかみ進んでいくよりほかはありません。被災地にとって、先が見える支援、先が見える保健活動、現地チームがやりたくてもできないことを形にする支援が必要であることは、これまでも繰り返し報告してきました²⁾³⁾⁴⁾。現場で起きていることに心を寄せ、目を向け、耳を傾け続け、共に考えながら行動することが基本です。被災地で言えば、現地のスタッフに依存しながら指示を求め、自分の役割の完遂を目指すことは本来の支援の趣旨ではありません。非被災地でも同じで、対象となる住民の方に一方的に指導をし、できない人を切

を求め続けること、考え続けることで少しずつですが、その積み重ねの中でまちづくりが進んでいくように思います。

繰り返しになりますが、「男性」は結果を急ぎますが、保健師は、名称はともかく、姿勢・精神は「保健師」に戻り、急がば回れの精神を再確認する必要があると思います。少なくとも佐々木亮平という男性保健師はマインドや仕事の姿勢は「保健師」そのものです。今年1年、皆さまとともに「保健師とは」をあらためて問い直し、大事なことは何なのか、目的目標はどこで、手段は何なのか考え続けながら進んでいきたいと思えます。よろしくお願ひします。

文献

- 1) 佐々木亮平, 岩室紳也. 地域保健で求められるソーシャル・キャピタル情勢事業 第3回 つながりを厭わない仲間づくり. 地域保健. 2017, vol.48, no.1, p.82-85.
- 2) 佐々木亮平. 陸前高田市の今 ~東日本大震災が警鐘する地域保健活動のこれから 第二報~. 月刊地域保健. 2011, vol.42, no.6, p.63-69.
- 3) 佐々木亮平. 未来を描きつつ先の見える支援を ~陸前高田市での支援活動 第三報~. 月刊地域保健. 2011, vol.42, no.7, p.58-65.
- 4) 佐々木亮平. 被災地における被災者（住民・公衆衛生関係者）の支援活動 ~陸前高田市の現地調整・後方支援から~. 月刊公衆衛生. 2011, vol.75, no.12, p.43-46.
- 5) 佐々木亮平, 岩室紳也. 東日本大震災で求められている公衆衛生活動とは 第6回 少しずつ見えてきたポピュレーションアプローチの成果. 月刊地域保健. 2015, vol.46, no.2, p.47-53.